

コロナ後の社会教育を考える

—これまでの蓄積と成果を踏まえて—

2022年4月23日

笹井宏益

戦後社会教育の原点—公民館の意義と役割—

「公民館の歌」（全国公民館連合会HPなどより）（作詞 山口晋一／作曲 下総院一）

自由の朝

1. 平和の春にあたらしく 郷土を興すよろこびも 公民館のつどいから
とけあう心なごやかに 自由の朝をたたえよう
2. 心の花のにおやかに 郷土にひらくゆかしさも 公民館のつどいから
希望を胸に美しい 文化の泉くみとろう
3. 働くもの安らかに 郷土に生きるたのしさも 公民館のつどいから
まどいになごむひとときに 明日への力そだてよう

公民館に期待される役割

話し合ったり議論したりして
民主主義を会得する場

皆で協力し合って作業して
文化を創る場

皆で協力し合って働いて
豊かになる場

公民館で行われる諸活動（公民教育）の特徴

- ▶ **実践教育**であること：地域の団体やクラブに所属しその運営の実際に触れることによって、初めて目的を達成できる
- ▶ **相互教育**であること：自分が会得したことを皆で自由に討議、研究、質疑し合うことによって、相互に見識を身につけられる
- ▶ **総合教育**であること：情操の陶冶や科学的知能の啓発等を含めた総合教育として実施する必要がある

戦後社会教育の確立

- 1946年 寺中作雄「公民教育の振興と公民館の構想」を発表
- 1949年 社会教育法の制定
- 1950年 図書館法の制定
- 1951年 博物館法の制定

戦後の社会教育制度の確立

学び（活動）の主体は一人ひとりの住民であり、いつでもどこで何を学ぼうと基本的に自由。制度は社会教育にかかる活動の枠組みだけ定める。

学校教育と社会教育との相違（1）

学校教育は
システマチックな活動
Formal
形式化・制度化された活動

- 組織的な活動
- 計画的な活動
- 一定の管理運営体制のもとでの活動（学校経営の存在）
- （多くの場合）**マネタリーベースの活動**

社会教育は
機能（作用）的な活動
Non-formal
形式化されない、多種多様な活動

- 個人または緩やかなつながりによる活動
- 計画がないかあっても緩やかな計画による活動
- 管理運営体制がないかあっても緩やかな管理による活動
- （多くの場合）**ボランティアベースの活動**

学校教育と社会教育との相違（2）

学校教育

システマチックに組織化されている
→教育委員会・指導主事・校長・教員
システマチックに計画化されている
→朝礼・授業・給食・部活動・学校行事

社会教育

ゆるやかに組織化されたり計画化されている
→グループ・サークル・団体（集団型）
→講座・セミナー・研究協議会・学習会など
施設に集まってする活動（集合型）

社会教育の本質的特徴

相手（仲間）がいて初めて成り立つ活動

相手との関わり合いによりお互いが成長する活動

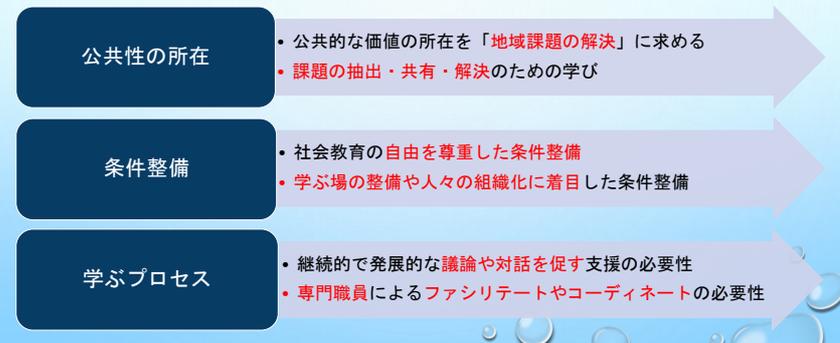
知識を得たり気づきを得たり自分で価値を創ったりする活動

課題とその解決プロセスの共有が相手とつながるための接着剤

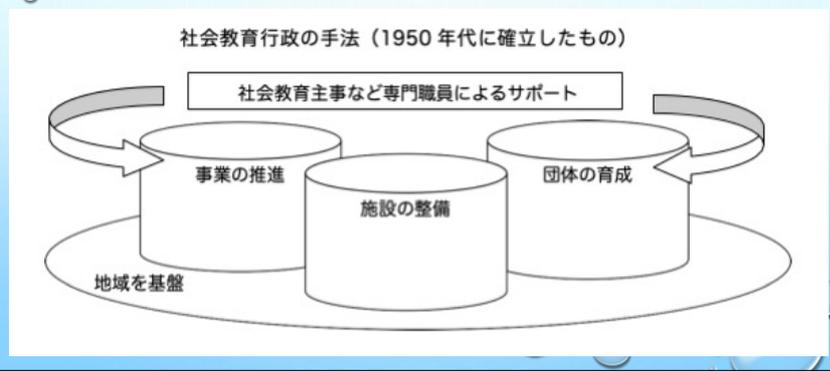
社会教育の本質を踏まえた社会教育行政の特徴



社会教育行政を実施する際の基本的視点



古典的な社会教育行政の手法（内容）



社会の変化と人と人との結びつきの変遷

1950年代～ 1960年代初頭	戦後復興期	農村共同体	地縁・血縁中心の人間関係
1960年代前半～ 1970年代前半	高度経済成長期	都市化 工業化	過疎と過密の進行 仕事中心の生活 組織内での分業
1970年代後半～ 1980年代後半	安定成長期	東京一極集中 サービス化 情報化	都市化が進行しつつも地方への関心高まる 仕事中心の生活 会社中心の人間関係（社縁）
1990年代～ 現在	バブル経済崩壊 停滞期	高度情報通信 ネットワーク化	地域づくりへの関心高まる 趣味やボランティア活動への関心高まる ワークライフバランス

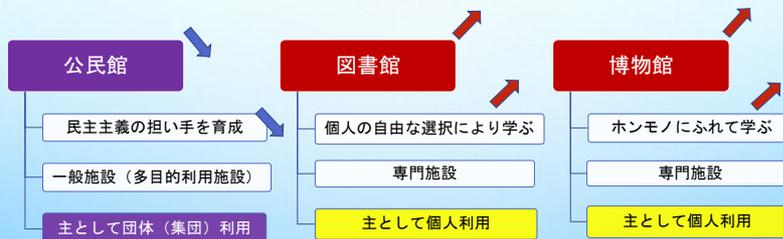
社会の変化と社会教育活動の変容

1950年代～ 1960年代初頭	戦後復興期	農村共同体	地縁・血縁をベースにした 戦後の社会教育モデルの成立
1960年代前半～ 1970年代前半	高度経済成長期	都市化 工業化	人口移動に伴う戦後社会教育モデルの衰退 民主主義の普及浸透（市民の成熟） 所得向上を背景に自己実現欲求の高まり
1970年代後半～ 1980年代後半	安定成長期	東京一極集中 サービス化 情報化	社会教育不要論 趣味教養中心の社会教育 古典的な社会教育関係団体の衰退
1990年代～ 現在	バブル経済崩壊	高度情報通信 ネットワーク化	生活志向・地域づくり志向の社会教育 人とのつながりに焦点をおいた社会教育 個別的課題から包括的課題へ

社会教育行政はその存在意義をどこに求めたか？

- 終戦直後
 - 公民（citizen = 民主主義の担い手）の育成（公民教育の推進）
 - 地域住民の生活改善（生活の合理化・近代化の推進）
- 経済成長期
 - 個人の充実や自己実現の推進
- バブル崩壊後
現在まで
 - つながりづくり／孤立・孤独の克服（社会参加の促進）
 - 地域づくり／生活の質の改善

社会教育施設の目的・機能



公民館の3つの機能

- 集う場 (Gathering Place):**
 - 生活の中で気軽に出会う
 - 互いに情報を持ち寄り共有する
 - 集合型学習の場として機能
- 学ぶ場 (Learning Place):**
 - 他者との関わり合いの中で、知識や技術を得たり気づいたり価値を創出したりする
 - 集合型学習や集団型学習の場として機能
- つながる場 (Connecting Place):**
 - 地域の人たちがネットワークを形成する
 - 機関や団体同士がネットワークを形成する
 - ネットワーキングの場として機能

私たちが直面していること

社会のフェーズ

- キャッチアップ型の目標の喪失と時代認識としてのVUCA
- ヒト・モノ・情報の移動性（モビリティ）や関係性の拡大
- 地球規模でのデジタル化・バーチャル化の進行

DXの進展

コロナ禍の蔓延

個人のフェーズ

- 「一元的な目的の達成」を目指す生き方への疑義・再検討
- 上昇志向の否定と生活充実志向
- 分断・孤立と「個の世界」の拡大

社会教育の本質的特徴（再掲）

相手（仲間）がいて初めて成り立つ活動

相手との関わり合いによりお互いが成長する活動

知識を得たり気づきを得たり自分で価値を創ったりする活動

課題と解決プロセスの共有が相手とつながるための接着剤

社会参加から社会教育実践までのプロセス

1) 他者と接する（例カフェなどで新聞を読む）

2) 他者と対話する（例気軽におしゃべりをする）

3) 他者と情報を共有する（例共通の課題を見つける）

4) 他者と関わり合う（例課題を共有し議論をする）

5) 他者とともに実践する（例課題を共有し作業をする）

社会教育はどのように変わるか

学ぶ（実践する）目的の個別化により、つながりの規模や形がマイクロ化・多様化する

バーチャルな関わり合いの普及に伴い、情報の収集・編集・発信の方法が変わる

プラットフォームでダイナミックに変容する関係性（対等な関係性）が創出される

課題のありようが総合的でありながら多面的・個別的・選択的になる

他者に関わる（社会に参加する）ための「接点」や「対話」などのプロセスが重視される

活動の形などがマイクロ化・多様化する

社会全体の学ぶ目的の喪失／個人の自由な選択の拡大／
モビリティの縮小（グローバルからローカルへ）

いくつかの小規模なグループ・サークルによる、身近な
ところでの活動に参加する

情報の収集・編集・発信の方法が変わる

情報メディアの高度化・パーソナル化・DXの進展による
コミュニケーションの普及が進む

いつでもどこでも誰とでも、またどのような内容でも
自由に情報の収集・編集・発信が可能となる

フラットでダイナミックに変容する関係性が創出される

バーチャル、リアルを問わず、対等な関係からなる
たくさんのコミュニティが創られる

既存の序列的な関係を越える、協働的で対等な関わり合
いが生まれやすい

課題のありようが多元的・個別的・選択的になる

課題のありようが個人の生活課題・地域課題・国家課題・
地球課題というように、総合的でありながら多元的・個別
的・選択的になる

多くの課題が相互に関連づけられるも、整理されないまま、
課題解決に向けて「自分のできることをする」という形で
関わるようになる

他者と関わるための「接点」や「対話」が重要となる

孤独や孤立状態にいる人が増えることから、社会教育活動の前提である社会参加を促進する重要性が増す

居場所や対話（相手を知り受け入れるための機会・会話）やサードプレイスが重要になる

これからの社会教育のキーワード

活動の形などがマイクロ化・多様化する → いくつかの小さな幸せ、小さなコミュニティ

情報の収集・編集・発信方法が変容する → パーソナル化、情報内容のボーダーレス化

対等な関係性が創出・拡大される → パートナーシップ、協働、折り合いをつける

課題への関わり方が変わる
地球課題＝国家課題＝地域課題＝生活課題 → 重層的な課題構成、ミッションの複合化、SDGs

社会参加プロセスが重視される → 居場所、サードプレイス、対話